平成10年3月17日　第3種郵便物認可
平成18年7月20日発行（4月・7月・10月・1月各20日発行）

豊橋市美術博物館友の会だより－2006年－夏号
Vol.61
FU-HAKU
Summer 2006

「造形集団　海洋堂の軌跡～サブカルチャーと現代～」より《新横浜ありな》

©The Japan Foundation.No reproduction or republication without written permission.
©Ooshima Youki

TOMO no KAI NEWS

FU風伯HAKU

Toyohashi City Art Museum

展覧会紹介

造形集団 海洋堂 の軌跡 ～サブカルチャーと現代～

7/28(金) → 8/27(日)

会場／豊橋市美術博物館

うさぎちゃん1号©KAIYODO

現在「食玩」という分野で絶大な人気を集める海洋堂は、昭和39年に模型店として創業されて以来、革新的発想と大胆な手法を貫きながら、フィギュア・メーカーとして徐々に支持層を広げ、ついには日本文化の一翼を担う存在へと成長を遂げた「造形集団」です。本展では、海洋堂の歩みを模型や食玩などの造形作品によって振り返るとともに、模型文化の啓蒙活動や造形師たちの活動にもスポットをあて、「海洋堂」という集団の本質と、現代文化との関連についても検証していきます。

カクレクマノミ©KAIYODO

太陽の塔©KAIYODO

記念講演会

7月30日(日)午後2時～　市役所13階講堂

「造形集団海洋堂のモノ創り」

宮脇修一 氏（株式会社海洋堂代表取締役社長）

市制施行100周年記念展

豊橋の風景 ～歴史を語るものたち～

7/21(金) → 8/20(日)

会場／豊橋市美術博物館

豊橋（とよばし）遠景（昭和初年頃）

明治39年（1906）8月1日、愛知県では名古屋市に次いで2番目、全国でも62番目という早い時期に豊橋は市制を施行し、今年100周年を迎えます。本展では、100年にわたる豊橋の歴史を様々な角度から検証し、生活に関わる懐かしい資料を中心に約400点を紹介します。

記念講演会

8月20日(日)午後2時～　美術博物館講義室

「"早咲きの花"にみる豊橋の風景」

菅原浩志 氏（映画監督）

SPレコードコンサート

8月13日(日)午後2時～　美術博物館講義室

第1部「100年の音色」　第2部「なつかしの歌」

紙芝居の実演

7月22日(土)、8月5日(土)、8月19日(土)

いずれも午前11時～・午後2時～　美術博物館講義室

「黄金バット・ナゾー編」「キンちゃんコロちゃん」他

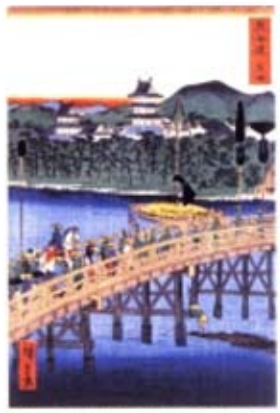
東海道名所風景展 I

7/22(土) → 9/3(日)

会場／豊橋市二川宿本陣資料館

『東海道名所風景』は、文久3年（1863）の14代将軍徳川家茂の上洛を題材とした浮世絵版画のシリーズです。将軍の上洛は、3代将軍家光以来229年ぶりのことで、多くの家臣を供とした大行列は大きな注目を集めました。幕末期、浮世絵版画には「時事ネタ」が多く採用され、メディアとして重要な役割を果たしました。このシリーズは、20軒以上の版元が16名の絵師を起用して製作し、文久3年4月から7月にかけて出版されたものです。宿場のほか街道周辺の名所や江戸市中、京都市中、大坂・伊勢などが取り上げられ、総数は160枚を超えます。

今回は、江戸日本橋から三州吉田までの前半を紹介します。



東海道名所風景　吉田　二代歌川広重

記念講演会

7月30日(日)午後2時～　二川宿本陣資料館講義室

「幕末の錦絵"東海道名所風景"」

桑山童奈 氏（神奈川県立歴史博物館学芸員）

【要申込み】7/15(土)より電話で二川宿本陣資料館へ（41-8580）。先着50名。

※入館料が必要です。

寄　稿

美術博物館の今日と明日

豊橋市美術博物館友の会会長　原　文成

今や公立美術博物館にとって冬の時代が続いている。

豊橋市美術博物館の新館建設は、平成13年度～平成22年度間の第４次基本構想・基本計画において、そのLEADING　PROJECTとして決定されていたが、本年に至り忽然として姿を消すに至った。現在、中心市街地活性化事業に「美術博物館の持つ機能の充実」が掲げられているが詳細は判らない。しかも５年をかけて事業化の検討が予定されるだけであり、着手は中長期を目安としている。

今回の実施計画の変更は、直接的には地方分権の推進による地方交付税の激減（平成14年60億円、15年55億円、16年21億円）や市債の急増（平成14年90億円、15年119億円、16年140億円）等による財政危機対策として策定されたものであることは理解できるが、政策担当者に公立美術館の低収益率（県美ベースで全国平均20%弱）や市民会議での政策実施順位についての要望が影響しているのかもしれない。

昨今の美術博物館の危機的状況は財政難だけでなく、その存在の大義が市民間に浸透していないこと、また、市民とのコミュニケーションが甚だ不足していることにもあると思われる。

だが、非効率と言われながらもそこに館があればこそ、億単位の地元作家からの寄贈があり、魅力的な作品があればこそ、作品の交換展示も可能となる。所蔵作品の時価も相当な額に上る筈である。収益率はこの点、行政評価手法としては無力である。

現代生活では便利・快適・効率が優先され、芸術や伝統的・地域的習俗や生活様式は非生産的で陳腐なものとして顧みられない傾向がある。その結果、地域の沈滞、誇りの喪失、そして文化の空洞化を招いている。人間は消費だけでは生きられない。美術博物館が他の公共施設と違うのは、現代の人が現在の生活のためにだけ使用する施設ではなく、文化を承継し、累積することによって、未来の人が生きるためにも存在するということに関わっているからであろう。したがって、その長期的視野に立つ基本計画はみだりに変更されてはならないのである。広域行政地域として「東三河市」や「浜名市」構想が語られる昨今だが、私たちは、新美術館がそのような広域に支えられることによってしか実現できない「幻の計画」にしたくないし、その実現を願う灯は消してはならないと思っている。

明日の美術博物館は、市民にとって親しみと、誇りと、有用性を体感できる美術博物館でなければならない。美術博物館は、建物とコレクションの一体化したものとしてイメージが定着しているが、未来の美術館を考えるとき、文化的・芸術的サービスの拠点としての使命からいって、ソフトがその施設の存在意義を決定する最も重要な要素ではないだろうか。公共施設として市民に開かれた美術博物館は、コミュニティ広場をもち、芸術を孤立させないで、工芸・演劇・舞踊・音楽などを連結し、市民が嬉々として参加できる場でなければならない。そのための膨大なソフトは殆ど用意されていないのが一般的な現状である。

ともあれ、明日の美術博物館の運営に対応するには、外国人スタッフを含めた学芸・展示・教育・電子情報の職業的専門家を擁していなければならない。財政を理由に人減らしが図られてきた昨今だが、能力のある人材の増員を怠れば間違いなく負組に転落しよう。地球規模のネットワークの構築、疾うにそういう時代に突入しているのである。また、優れた作家や若い芸術家たちの存在を内外に発信し、活動を励ます施策がなければ流出は避けられない。芸術の担い手がいない地域は不毛化する。

人口38万人の一宮市では、地元作家が「一宮市を文化不毛の都市にしたくない」「金儲けだけでなく、もっと文化に目を向ける地域になって欲しい」と「市美術館・美術ギャラリーを建設する会」の活動を６年間、地道に行っている。

もともと、この国の美術館は、素朴な権威主義的運営のもと「ハコモノ」と「名品主義」によって造られてきたから国際化や財政不況に対しては無力に近い。わが国美術館のソフトレベルの問題に加えて、陳腐化が進む危うさもある。時代の流れは速く、文化不毛の彼岸は意外に近い。行政の決断に期待するとともに、友の会自身、会員サービスの域を越えて、事業展開を図るため、非営利法人化を目指す時期に来ているのかも知れない。

友の会創立20周年記念北海道研修旅行

「野田弘志画伯をたずねて」

まっとうな、正統の絵

水谷好克（747）

けい子夫人の出迎えで、北海道・有珠山の麓に建つ野田弘志さんのアトリエに足を踏み入れた時、ホーッ、と声にならぬ嘆声が一斉に洩れた。天井の高い、50畳ほどもある広いアトリエ。壁面や床いっぱいに、鹿・羊・鯨・キリン・河馬・虎、等の頭骨や恐竜の化石が並び、哲学書をはじめとする膨大な書物、図録、スクラップ等の資料が揃って博物館のよう。140本もの縦横の蛍光灯、描き手ではなく巨大なキャンバスの方が上下左右に動く大イーゼルが2基。…あの写実を超えた写実を制作するためには、このような設備が要るのだったか、と納得させられる究極のアトリエだった。ふうむ、と感嘆しつつ、次には場所を変えて野田さんへの質疑。大野学芸員のまこと鋭い突っ込み、「『やませみ』の絵のやませみは、浮いて見えるんですが？」「ああ、あれは台があるんです。描いてないだけ」「フェルメールとレンブラント、どちらがお好きですか？」「うーん、どちらも…」「レンブラントの、個人を描いた肖像が、人格まで表現されてて素晴らしい、と伺いましたが、では『夜警』は？」「うーん、あれも…」誠実に一所懸命答えようとされる野田さん。この方の人柄が滲むような、いい時間だった。

アトリエ内部

野田弘志さんは、本籍地は広島だが、豊城中学、時習館高校、と青春時代を豊橋で過ごされ、豊橋とはゆかりの深い画家だ。野田さんの絵は、エアーブラシ等の機械も駆使して「写真のよう」に描くスーパーリアリズムとは一線を画す。あくまで細い面相筆を使って丹念に描いていく手作業の積み重ねだ。時間の集積といってもいい。そうして、写実は目的ではない、方便に過ぎない、と、野田さんは言う。徹底的に描くことで、なんらかのプラスαが現れることは間違いないのだ、そうした絵は、写真よりよくなるはずのものなのだ、と。また、絵、をイラストと峻別され、絵とは哲学なのだ、とも言われる。

論語・述而第七の冒頭に「述べて作らず、信じて古えを好む」とある。孔子は自身で創作はしない、古聖人の教えを信じて実践するばかりである、と言った。これは超保守的な考えだろうか？そうではあるまい。古聖人の道に、何かひとつでも自分の創意を加えるためには、まずその道を完璧に踏み行うことをせねばならぬ。泰山の頂をさらに高くするには、泰山の頂を極めねばならぬ。孔子はそう言っているように思われる（下村湖人『論語物語』より）。野田さんの絵画における姿勢はこれではあるまいか。自分は新しいことは何にも考えていない、と言われる野田さんの愚直ともいえる制作姿勢は、かえって新鮮にみえる。まっとうな、正統の絵を一貫して描かれているのである。

野田弘志邸前にて

「存在」そのものが神秘であり、美である、とは、野田さんの絵画をみる限り、全く本当だと思われる。そうして、膨大な時間を重ねて描かれた野田山脈というべき作品群のうち、飛び抜けた高峰のいくつかを豊橋市美術博物館は所蔵している。画家としての処女作「やませみ」(50P'71)、「黒い風景　其の参」(80F'73)、「石」(60F'81)、「TOKIJIKU（非時）Ⅰ Egg」(80F'91)、宮本三郎賞受賞の「TOKIJIKU（非時）Ⅶ Wing」(100F'93) 等々、そうして加賀乙彦の小説『湿原』の628枚に及んだ鉛筆挿画('83～'85) のうち最高の何点かを。これらを間近に見られるのは、豊橋に住む幸せだ。来年には20年ぶりの全国巡回大個展も予定されている。この6月11日に古稀を迎えられる野田さんが、さらに、どんな境地を見せてくれるか、今から楽しみでならない。

座談会風景

「TOKIJIKU（非時）Ⅻ Wing」 1993年
豊橋市美術博物館蔵

研修旅行に参加して

北海道へ渡るのは私自身二度目で、一度目は昨年6月に道東の釧路に写真家の水越武さんを訪ね、写真展の打ち合わせをしている。

今回は、洞爺湖周辺を中心に札幌、小樽といった道南を巡る研修旅行に同行させて頂いた。密かに楽しみにしていたのは、イサム・ノグチの構想を基に札幌市内につくられた「モエレ沼公園」を体感することであった。生憎の雨模様で時間の制約もあり、189haという広大なエリアを隈なく廻ることはできなかったが、ガラスのピラミッド－愛称 "HIDAMARI" は期待に違わず、秀れた彫刻家のコンセプトが建築物に脈々と息づいていた。

もう一つの楽しみは、久しぶりに洋画家の野田弘志さんとお会いすることであった。

野田さんには、イタリア・ルネサンス期の巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチについてもお尋ねした。人間を描くためにデッサンを繰り返し、挙句の果てに解剖まで立ちあって、筋肉の組織や骨格の構造まで掌握するという徹底したリアリズムへの探求心を賞賛した上で、惜しむことなく大量の時間を投入して、空間遠近法やスフマート（独自に編み出したぼかし技法）を駆使して制作された傑作《モナリザ》の凄さについて語っていただいた。

座談会を通して印象に残ったことは、野田さんがめざしているリアリズムが、時間までも取り込んで、目の前に展開する空間すべてを描ききること。つまり、その対象が人物であれば性格や精神までも、物体であればその周囲に存在する空気や重力さえも表現しようとしていることであった。次回は、さらに突っ込んだ話を聴いてみたいと思っている。

（豊橋市美術博物館主任学芸員　大野俊治）

モエレ沼公園　ガラスのピラミッド

展覧会紹介

〈市制施行100周年記念展〉

豊橋市美術博物館「絵画名品100選」

平成18年10月6日(金)～11月5日(日)展示室＝1・2階全展示室　【観覧無料】

※10月9日(月・祝)は開館し、翌10月10日(火)は休館

展示予定の作品の中から、ボランティア・ガイドの皆さんに紹介していただきました。

「グァディスの家」
三岸節子

白い家、赤い素焼き瓦の屋根、空は抜けるような青。－白に赤に青－三岸の好きな色が競合することなく共存し、互いに色を引き立てあっている。デッサンを重ねる内、頭と心で消化され、新たに生み出された風景。荒削りでそれでいて妙に人間臭い白い壁の街、憧れていたスペイン・グラナダの風景である。

朝倉みどり（786）

「谿泉」　中村正義

150号のキャンバスには、大胆に豊満な肢体が柔らかなタッチで描かれている。渓谷を背に三人の裸婦が。淡い緑色が画面全体に浮び上り、清楚な雰囲気を漂わせる。優しそうな眼差しのむこうに何があるのだろうか。1950（昭和25）年の第6回日展で特選となり、戦後の日本画壇低迷期に、この若き才能の出現は歓迎され、一躍脚光を浴びた作品である。

栢植紀子（1054）

『私の好きな１点』

「雪后閑庭」
平川敏夫

1985（昭和60）年に駒ケ岳山麓にある光前寺の池泉式庭園を４年越しで完成させた四曲一双屏風である。白から黒にいたる墨の濃淡を自在にし、穏やかな中間色の墨の暈しに木々が幻の様に白く浮き上がっている。一面雪に覆われた庭園は深閑とした透明な空気が漂い合う幽玄な世界に包まれている。白描水墨の技法を編み出し、東洋の伝統を踏まえ、現代感覚に満ちた平川芸術の代表作の一点と言えるのではないでしょうか。

三木千津子（771）

「雲行雨施」
白井烟嵐

烟嵐は、大正・昭和の時代に官展系や日本南画院など団体展で活躍した。「雲行雨施」は、1949（昭和24）年第５回日展で特選を受賞した作品で、中国の名山“黄山”に白雲のかかる様子を描いたものである。背後の遠山から手前の渓谷まで、山水画の伝統的な画法を守りながら緻密に計算された構図とダイナミックに表現された技法は完成度が高く、見るものを圧倒する迫力がある。

濱本正彦（1329）

●ギャラリートーク案内●

会期中（月・土を除く）　毎日２回
午後２時～・午後３時～

美博ボランティア・ガイドの皆さんは、自ら勉強会を持ち、日々研鑽されています。
http://www.abee.cc/contents/gyararitop.html

友から友へ Members to Members

倉敷で育って

石田由子（1157）

私が絵画に興味を持ち始めたのは、中学生の頃でした。当時、私は倉敷に住んでおり大原美術館がすぐ近くにありました。その頃の大原美術館は現在のような大きなものではなく、ギリシャ神殿を思わせる入り口と、ロダンの"カレーの市民"の立つ建物だけでした。入場者も少なく、部屋の真中でゆっくり鑑賞することができました。私の通った中学校には、廊下や階段に名画が架けられていました。（勿論写真ですが）ルオーの道化師、モネの睡蓮、ホドラーの木を伐る人などが印象深く今も心に残っていますが、出会いは中学校の廊下でした。それらの絵は大原美術館に所蔵されていましたので、いつでも本物を見ることができました。特に、ルオーの道化師の重厚さは写真では解りませんでした。いつでも、身近で本物と出会えたことが、美術館好きになる元だったかもしれません。また、倉敷には民芸に対する環境もいいものがたくさんありました。織物、染色、陶芸などで、なかでも、浜田庄司の作品は大好きでした。泥臭いなかに、どこかモダンで目をひく形と色合いが大好きです。

だれでも、人生のどこかで、ふと出会ったものが心の安らぎになったり、支えになったりするように思えます。それは絵であったり音楽であったり文学であるかも知れません。そんな出会いができる街に豊橋を育てていけたらいいなと思っています。

Exhibition Spot

第3回　SEBONE展

sebone VOL.3

たくさんの人々が集い、アートと出会い徹底的に楽しむ「アートフェスティバル」

期間：平成18年8月24日（木）～27日（日）
会場：水上ビル・狭間児童公園・MEIHO

豊橋公園三の丸近辺での野外美術展
まち空間への提案展

THOUGHT ON THE LANDSCAPE #3

期間：平成18年9月15日(金)～10月10日(日)
主催：とよはしアートユニット

第8回 遠州横須賀街道ちっちゃな文化展
～町並みと美の晴れ舞台～

期間：平成18年10月20日(金)/13:00～17:00
21日(土)/ 9:00～21:00
22日(日)/ 9:00～17:00
会場：掛川市大須賀町内(横須賀街道沿線及びその周辺)
主催：遠州横須賀倶楽部・大須賀観光協会

創る みる 眼 見ることの冒険 三遠南信アート展

会場	会期
浜松：駅前遠鉄百貨店８階	９月20日～25日
飯田：飯田創造館	10月12日～17日
豊橋：豊川桜ヶ丘ミュージアム	11月14日～26日

Museum Check

会場	会期	展覧会名
愛知県美術館	8月 4日～10月 1日	愉しき「家」
名古屋市美術館	6月17日～ 8月15日	ニキ・ド・サンファル展
松坂屋美術館	7月22日～ 8月20日	マリア・テレジアとシェーンブルン宮殿
刈谷市美術館	7月22日～ 9月 3日	松岡　徹展（カリヤファンタジー計画）
豊田市美術館	7月15日～ 8月27日	黒田清輝展
岐阜県現代陶芸美術館	7月29日～10月 9日	加守田章二展（20世紀陶界の鬼才）
岐阜県美術館	9月 5日～10月 9日	前田青邨展
浜松市美術館	8月19日～ 9月28日	棟方志功展
静岡県立美術館	9月12日～10月30日	世界遺産ナスカ展（地上絵の創造者たち）

収蔵品紹介

[ちゃぶ台（卓袱台）]

豊橋市民俗資料収蔵室蔵

ちゃぶ台は飯台・食台とも呼ばれる。その語源は茶飯（チャファン）、卓袱（チュオフ）などの中国語に基づくといわれるが、ちゃぶ台そのものは日本で発明されたものである。

ちゃぶ台が使用され始めたのは、明治時代後期のことで、それまでの日本人の食事は、家族一人ひとりが箱膳（はこぜん）と呼ばれる縦横およそ30センチ四方のふた付きの箱に自分専用の食器を入れておき、食事の際に箱から出して使い、ふたは盆として使用する。食器は洗うことなく膳の中にしまう。今から考えると、少々不衛生のようであるが、それが当時の一般的な食習慣であった。

さらに、家長の膳、祖父の膳、祖母・主婦の膳、子どもたちの膳、使用人のものというように、家族の中での序列によって膳が置かれる位置、形状とも区別されていた。

戦前の日本人社会の土台ともいうべき家長を中心とする大家族制と、戦後の、とりわけ昭和30年代以後の高度経済成長を支えた現代社会の構成単位である核家族制とのちがいを、箱膳とちゃぶ台の二者が端的にシンボライズしている。

もっといえば、丸いちゃぶ台の周りには上座も下座もなく、母親を中心にしての家族の営みがあり、四角な箱膳には家長、つまり父親を頂点にした厳格な序列、きちんとした秩序が垣間見えてくる。

（豊橋市美術博物館民俗資料担当嘱託員　冨田 弘）

※［ちゃぶ台］は、市制施行100周年記念展「豊橋の風景～歴史を語るものたち～」(7/21～8/20)で展示されます。

講座のご案内

○友の会講座

「フランス美術紀行」金原宏行 氏（豊橋市美術博物館長）
第1回：8月11日（金）午後2時～3時　［バルビゾンへの道］　第2回：8月26日（土）午後2時～3時　［パリの美術館］
会場／美術博物館講義室　＜聴講無料＞
秋の海外研修旅行へ参加される方は事前レクチャーとしてぜひ！ご興味のある方どなたでもお聞きいただけます。

○愛知県陶磁資料館出前講座

「人間国宝の世界ー陶磁を中心としてー」大長智広 氏（愛知県陶磁資料館学芸員）
8月27日（日）午後2時～　会場／美術博物館講義室　＜聴講無料＞
この秋、愛知県陶磁資料館で開催される「日本のわざと美」展（10/7～11/5）に出品される作品をスライドで紹介するほか、実際に人間国宝の陶芸家作品（1点）をご覧いただきます。

編集後記

■　友の会ボランティアの方々が一堂に会し、茶話会が5月14日(日)の総会開催前に行われました。会員同士の繋がりが少し広がった、楽しい一時でした。尚、総会報告は別紙にて同封させて頂きます。そして、今号より全ページカラーで、お届けすることになりました。皆様のご意見をお待ちしております。

■　この夏開催される企画展「海洋堂の軌跡」は、今、コンビニやキャラクターショップを賑わせている「食玩」でおなじみの**フィギュア**が展示される。かつてのお菓子のオマケを一新した人気キャラクターや動物、小物などのリアリティ溢れる縮尺模型。子供達はもちろん、多くのマニアの来場も期待される。アミューズメントパーク化した豊橋市美術博物館を皆さんも楽しんでみては?

（編集部）

豊橋市美術博物館 友の会だより「風信」第61号　発行人・発行所／豊橋市美術博物館友の会　〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882　平成18年7月20日発行（4月・7月・10月・1月20日発行）　平成10年3月17日／第3種郵便物認可　定価200円
※会費は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。